



上 川崎市にて行った上映会  
右 強制送還されたエリシディン氏  
(カザフスタンのウイグル人難民)  
下 被災地東北の桜のつぼみ



目次	
表紙	1頁
会員のみなさまへ	2頁
協会活動報告2010春夏	3頁
南三陸レポート	4頁
書籍紹介	13頁
概説 ウイグルの歴史	14頁
お知らせ	16頁
編集後記	16頁

会員の皆様、日頃よりお世話になっております。

2009年7月5日、ウイグル民族にとって忘れることの出来ないウルムチ事件から二年が経過しようとしています。事件以後、世界ウイグル会議を中心としたウイグル人組織は、中国政府に強い抗議を行い、さらに世界の人々に向けても、ウイグル民族への弾圧の事実を発信してきました。しかしながら、二年を経過した今でも尚、事件の全体像を把握するまでには至らず、多くのウイグル人が逮捕拘禁されたままです。

共産党によるウイグルへの侵略。それとは逆に、多くの中国人を多くの国に移住させ始め、その国の経済を牛耳ろうとしています。特に中央アジア、さらにアフリカにおいてもその傾向は強まっており、私は、今後それらの国の未来が、ウイグル民族をはじめ、チベットやモンゴルの人々と同じものになってしまうのではないかと危惧しております。

このような状況だからこそ、私達が繰り返し抗議の声を上げ続ける必要があります。さらに、その声が、ウイグル民族だけではなく日本人や中国の経済的浸透、人口侵略に焼いている国の人々を救うことにも繋がるのではないかと、そのようにも考えております。

今後も、一步一步、着実に前進して参ります。皆様のご支援と、ご協力を心よりお願い申し上げます。ありがとうございました。

特定非営利活動法人 日本ウイグル協会

会長 イリハム・マハムティ

## 協会活動報告2011春夏

### 協会スタッフ有志が各自震災支援へ

去る3月11日に発生した東北地方を中心とした大震災に際し、協会スタッフからもグループや個人で各種支援活動に参加致しました。

蒼空編集部にて把握している活動は左記の通りです。

- ・被災地への支援物資集積・輸送活動
- ・被災地での泥・瓦礫撤去作業
- ・被災地避難所での物資仕分け作業
- ・遠隔避難所での物資仕分け作業
- ・被災地向けオフィス家具類搬出作業

ほか



気仙沼ボランティアセンターにてボランティア登録の列に並ぶ協会スタッフら。

この日の作業は浸水した民家の片づけなど。



食料品や生活必需品を満載し、陸前高田市へ出発する直前の車両。

この後都内別所にてさらに生鮮食品類を積み込む。

独自に企画実行したものの、現地ボランティアセンターに登録してのもの、各種支援運動と連携したもの、他団体メンバーと協力してのもの等があり、また、活動場所も各被災地から都内まで多岐に渡る為、個別の活動の紹介は割愛致しますが、各人が協会の活動と仕事の合間を縫い、培った人脈やスキルを以て、わずかも被災地の方々の為になったのであれば幸いです。

### 「ウイグル人ジャーナリスト解放のための請願署名」締め切り

3月7日の開始以来、会員の皆様にも多大なご協力を頂きました。請願署名運動ですが、5月31日を以て締め切りとさせて頂きました。開始直後の震災の影響もあり、大々的に運動を展開する事が憚られる状況下にありながら、全国より数百筆の署名が届けられました。現在、震災対応に全力を傾けて居られる国会議員

の先生方の状況にも鑑み、提出時期は調整中でありますが、決まり次第、正確な署名総数と共に、協会サイトや本紙面でもご報告させて頂く予定です。今しばらくお待ち下さい。

### 協会主催上映会「映像で知る放射能被害」

6月18日13時30分より、川崎市国際交流センター第五会議室にて、協会主催上映会「映像で知る放射能被害」を開催いたしました。

本上映会に先立ち、周辺住宅地において告知チラシのポスティングも行い、参加者の方の中には、このチラシを見て会場に足を運ばれた方も居られました。

上映作品は第1部が「Death on The Silk Road」はとよひろしまの空を」の2作品、第2部が「Death on The Silk Road」は「ヒロシマ・母たちの祈り」の2作品です。「はとよひろしまの空を」は原爆投下当時の広島島の少年が飼っていた鳩を主人公にしたアニメ作品、「ヒロシマ・母たちの祈り」は、原爆で被害を受けた方々のその後の人生を追ったドキュメンタリーです。ご存じ「Death on The Silk Road」は中国によって実施された核実験による影響を潜入取材したドキュメンタリーです。会場ではさらに、中国の核実験による被害の詳細な解説が、福島第一原発の被害等との比較も交えて行われました。

来場者はのべ約20人、年配の方や小学生など、家族連れで訪れた方々も居られました。

日本人にとって身近な核被害である広島島の映像と合わせ、ウイグルの核被害がより実感できる上映会になったのではないのでしょうか。

(写真は表紙上を)ご覧ください。

## 南三陸レポート

今次震災に際し、協会有志らによる様々な被災地支援活動が行われました。

そのうちの一つ、南三陸支援に携わったメンバーによるレポートをご紹介します。

編集部

東日本大震災から三ヶ月半が経過しました。今回、廣瀬はジャーナリスト山際澄夫さんのご紹介、そして支援物資のプロジェクトに個人的に協力する形で南三陸町を三回訪問致しました。今回は、その際にまとめたレポートを掲載させていただきます。実際に文章を書いた時期と比べ、仮設住宅への入居も増え被災地の状況は徐々に良化しているのですが、今回はその当時私がまとめた文章をそのまま掲載させていただきます。

### 南三陸レポート 其の一 (4月16日)

仮眠を取りながら真夜中の東北自動車道を駆け抜けて、仙台南インターから日が昇る太平洋沿いの仙台東部道路に抜けると、右手に津波の爪跡が見えてくる。目的地の南三陸町までは、あと百キロ。進行方向右側の視界が開ける度に、三月十一日、東北地方太平洋沖地震の直後に発生した大津波によって太平洋側の街を余すところなく飲み込んだその被害が垣間見える。そして、カーナビの目的地までの距離を示す数字が減っていく度に、私の緊張感は一比例で増していった。

私と共に北へ向かう車も、すれ違う車も、自衛隊・



南三陸町の中心部・志津川地区  
川の両岸に形成された市街は見る影もない。

警察、そして救援物資を積んだ車ばかりである。又、国道45号の一部が津波によって浚われている為、迂回路として利用する一般車両も増え、通勤ラッシュのように渋滞していた。ついに現場に足を踏み入れたことを実感し、深呼吸で自らの身体を宥めながら車を進めると、周囲の車両たちは石巻や東松島などのICで各々の目的地を目指すために散っていった。そして、南三陸町に至近のICを降りる頃には車両の数はまばらになっていた。

南三陸町・志津川の海まで十五キロ程の道の駅で最後の休憩。訪問先である志津川中学校に向くには少し早い為、待機していると、春の日差しの中、野良猫が誰からも構ってもらえないにも関わらずゴロゴロ喉を鳴らしながら、太陽に腹を向けて不貞寝していた。平和な風景で、私も一瞬気持ちが安らいだが、今回の道程の中では唯一の時間だったかもしれない。

私が被災地に向かった理由は、実はこんな新聞記事を目にしたからだ。四月四日付の毎日新聞の記事、

「尽きた食料：信頼の分配、助け合う自宅避難民（宮城・南三陸町）」がそれである。避難所に物資が行き渡り始める一方で、大津波の直撃を免れた自宅で暮らす「自宅避難民」への支援が課題となっているという記事だった。であるなら、そのような境遇にある人に支援物資を持っていこう。特に誰に相談するでもなく、少しづつ支援物資を買出し、レンタカーの手配を行い出発の日を決めたのだ。

長野で行われた北京五輪の聖火リレーの際に知り合った、ジャーナリストの山際澄夫さんから連絡があったのは、出発の準備を人知れず殆ど済ませた後のこと。山際さんは、南相馬町と南三陸町を既に訪れ、被害の惨状を取材し、避難所での生活を余儀なくされている多くの被災者の方を目的の当りにしていた。

山際さんの話を伺うと、心は決まった。私が兼ねてから気になっていた「一番困っている人がいるかもしれない場所」がそこであるだろうことが容易に予想もできた。では、そこに向かってみよう。私は、山際さんから今回の救援物資の受け手である世話役のKさんが避難生活を送っている南三陸町の志津川中学校を訪れることにしたのである。

南三陸町は宮城県の北東部、鱈の生産が日本一の気仙沼市の南にある人口一万七千人余りの町だ。他の三陸の町同様漁業が盛んで、志津川と歌津という地区に人口が集中している。太平洋に面した志津川湾と伊里前湾という二つの湾は、牡蠣や帆立、ウニ、ワカメの養殖が盛んで、三陸の典型的な港町だ。昔は養蚕も盛んだったという。又、夏には小規模ではあるが海水



浴場や磯釣り場に、仙台などから観光客が訪れ、国道45号沿いが賑わう。そんな町である。

登米市と南三陸町を分ける境界を過ぎ海が近くなるのを確認すると、周囲の空気が一変する。津波が侵蝕したであろう境界を超えたのである。途端に猫が不貞寝出来るような、小春日和の暖かな風景は一変し、津波によって流されてきた拉げた車や漁船、瓦礫の山が視界に飛び込んできた。まだ地図で確認する限り、海までは3キロはある。そこから暫くして戸倉地区、そして志津川へ入っていったのだが、残念ながら私がみた風景は、前述した街の光景ではなく、瓦礫と外壁などを身包み剥がされた鉄骨の建物だけが残る風景であった。

志津川中学校では、世話役のKさん御兄弟、そしてOさんが迎えてくれた。避難生活はもうすぐ四十日を迎えるという。到着して、炊事場で炊事を行っていた女性の方々にも挨拶をし、荷物を下ろすと、すぐに私は炊き出しの昼食に誘われた。私は、昼食や夕食は道中で仕入れてきたと話し最初は遠慮したのだが、「物資の配達は午後だし、遠慮なんかすることないから」のKさんの一言を甘んじて受けてしまった。私が避難所について、まず行ったことはなんと「食べること」だったのである。

その日の昼食は、海老名にあるモスクに集うムスリムの方々の炊き出しによるチキンカレーだった。この中学校の生徒も、もちろん避難所の方も、美味しそうにカレーを口に運んでいた。私は炊き出しを行って

いる方とも話をしてみた。彼らはパキスタンとインドネシア、マレーシアの方であったが、三陸の各地でチキンカレーの炊き出しを行っているという。彼らは今回の支援の理由を、インドネシアを中心に甚大な被害が出たインド洋大津波の際、多くのイスラム教団に日本が支援を行ってくれたこと、そして気仙沼を中心とした紡績関係の企業に会社に、様々な技術を学ぶ為に来日しているムスリムが相当数おりいつもお世話になっているので、今回は助けたいという気持ちでやっていることを説明してくれた。

食事を終えると、私が自分で調達した物資、さらに地元の友人・後輩から託された物資、そして山際さんがHPで募集を掛け全国各地から送られた物資も数箱、キャラバンに積み込む作業を始める。

私が訪問した時点では、山際さんが募った物資は、中学校武道場の8畳ほどの空き部屋に一度集められるシステムになっていた。そこで一度荷物を集積し、大規模な避難所ではなく、比較的小規模な避難所を対象に物資を配っているのである。



南三陸町からの帰路、別所にて活動中の協会スタッフ有志らと一時合流。写真は被災を免れた内陸部山中にて。

南三陸町では、現在でも四十五の避難所（四月十六日時点）に、数千名単位の被災者の方が苦しい避難生活を続けているが、その比較的物資の行き渡っていないだろう場所に、山際さんの支援物資が三人の世話人の方の手によって運ばれているのである。

山際さんの意に賛同し届けられてくる支援物資は非常に好評であると、世話役のKさん（弟）は話してくれた。女性用の下着、化粧水、乳液、ハンドクリーム、そして雑誌類など、通常配送されてくるような支援物資にはなかなか含まれないものが多いからだという。ただ、膨大に量があるわけではないから、適量をなるべく小規模な避難所配る。そういう場所であれば、殆どが長年のご近所さんなので物資の取り合いなどが起こらず平和裏に分配されるので安心というわけだ。

口は決して良くないが情に厚く、決して自分だけが良ければ良いという考えは町にはないと世話人さんは話してくれた。私もそれを信じ、少しでもこの町の誰かの為になればそれでいい。そう思いながらの仕分け作業だった。

世話役さん三人と、どのような場所に荷物を運ぼうかという話になり、私の希望を話した。前述した「自宅避難者の元へ」という件である世話人さんの一人のOさんが、「被害も確認できていないので行ってみたい」という場所を口にした。それは中学校から十五キロ程離れた隣町である歌津から突き出た岬の集落だ

った。Oさんは、震災以降安否の確認はしたものの、その後は連絡を取っておらず連絡を取ることにしたのである。携帯電話が繋がりOさんが電話を始めると、先方からは「物資を受け入れたい」という回答だった。受け入れ先のAさんが住む地区の状況は、以下の通りだ。

「百世帯、百七十人程度の集落なのですが、六割程の家が流されました。残った家に自宅避難という形になっていきます。電気・水道は復旧の見込みはありません。家は無事でも車が流されている人が多く思うように動けません。又、自宅避難者には基本的に救援物資はもらえません。食べ物は何少配給されるようになりましたが、生活物資全般が不足しています。今は、本当にきつい状況です。職業は皆漁師ですが、瓦礫が多すぎて漁の再開が出来ません。早く再開して直ぐにでも出たいですが、現状は非常に厳しいと思います。」（電気は五月三十日に復旧、水道は復旧未定）

すぐにこの場所に今回の物資を運び入れることが決まった。少しでも困っている人のところにといい思いで現地に入ったが、震災から一カ月を経過してもなお、そのような境遇にある人が存在するのだ。そのような境遇にある被災者の方は他にも必ずいるはずだが、一先ずすぐに向かう事を約束して電話を切ると、その集落へと向かった。

支援物資と私、そして世話人さん三名を乗せたワゴンには、国道45号を気仙沼方面に向かう。国道と言っても、アスファルトが津波に浚われ自衛隊などが救助・物資輸送などの為に緊急的に補修した、所々砂利道のオフロードである。しかし、このルートは被災者の命をつなぐ道であることには違いない。前回までとは言わないまでも、今地盤が沈下してしまった状況でもう一度津波が襲ってきたら、間違いなく再び寸断されるだろう。

さらに気仙沼方面に進むと、世話役さんも今まで確認していなかったという被害の光景が目に見え込んでくる。そして、一人の方がこう呟いた。「廣瀬さん、復興は無理かもしれない」。その言葉に私は言葉を返すことが出来ないでいた。テレビで流れるCMでは、有名スポーツ選手やアイドル、芸能人が「勇気」「希望」「絆」「二人じゃない」「頑張ろう」とはいうものの、被災地においてはそんな言葉が完全に宙を浮き、泡のように弾けていく。それくらい、絶望的な風景。これが延々と続くのである。（四月中旬現在、電気の復旧は突貫で作った仮役場位で、町民のほとんどがテレビすら見ていない）

志津川の街の出口から清水浜という小さな集落を過ぎ歌津まで国道45号を使うと約八キロある。しかし、そのうち津波に侵蝕されずに済んだ箇所は、標高が三十メートル以上ある箇所、全長二キロ程の箇所のみだったようだ。その途中では、遥か頭上の太い木の枝に布団が引っかかり風に揺れていた。布団を運んだのは

誰でもなく他でもない津波なのだが、助手席に座り飛び込んでくる光景があまりにも非日常過ぎて、途方に暮れるという以外のこと何も出来ないでいた。

「既に昔の風景を忘れそうになっているよ」。車の中で、もう一人の方がこう呟いた。津波は人の命や財産だけでなく、昔の記憶や思い出も消し去っていくのだ。色々な思いが心を渦巻き、最初の「復興は無理だ」と呟いた世話人さんの言葉にまともな反応も出来ず、言葉も返せぬまま、岬の先端を目指すワゴンは国道四十五号を逸れ、現時点で岬に通じる唯一の狭い道に入ってしまった。それにしても、ここまで言葉に出来ないという感覚に襲われたのは、本当に初めてかもしれない。

さらにその先、岬に奥の集落に入る最短距離のルートは津波に襲われた挙句、地盤沈下を起こしており、手の施しようがない程に破壊されていた。迂回ルートを目指し、途中途中は非常にアップダウンの激しい道が続く。仮に家が無事でも、車が流されたら移動は本当に困難である。そして、その道すがら、右手に伊里前湾と志津川湾、左手に僅かに太平洋を望めるポイントを通り過ぎた。抜けるような青空に、穏やかな波の真つ青な海、海と空がその青さを競っているかのよう

に思えた。

その海が、あの日、たった一日だけ狂気と化したのだ。私なら、どんなに恨んでも足りないくらい海を恨んだかもしれない。

ここまで書いてしまったので、既に述べておこうと思うが、私がこの一日半で出会った人の中で、「海」について恨めしいという感情を表した人は一人も居なかった。復興は無理だと呟いた世話役さんも、「落ち着いたらサーフィンも始めるし、釣りもしたいね」と後に話してくれた。南三陸に生きる人々にとつては、何があつても海と共に生き、そして死ぬ。もし、「海」を恨んでしまったら、自らの存在を否定する事と同意であり、死ぬことと同意なのかもしれない。

今回、物資を運んだのは見渡すと伊里前湾が一望できる素晴らしいロケーションの民家だった。前述のとおり、その周辺に暮らす方は百七十人前後、約六割の人が家を津波によつて失い、そして自宅待機や小さな集会所に寝泊りするという形で、避難生活を続けている人々だった。もちろん、私の訪問した時点では電気は復旧していなかった。水道に至つては復旧の見込みは絶望的であるという。

到着すると、これぞ海の男というような男性陣が何人も待ち構えており歓迎してくれた。地元の人々が用意してくれたお菓子類もトレットペーパーも、すべて歓迎してくれた。これから、又、周りの人も呼んでしっかりとシエアをしていただけるといふ。そして、ひとまずキャラバンに積み込んだ物資を積み下ろすと、一人の漁師の方が私にこう言った。

「どうにかして、発電機が手に入らないものだろうか…。それがあれば、瓦礫を掻き分けてでも、漁に出ようと思うんだが…」

発電機は、地震の翌日から東日本を中心に手に入らない状態が続いている。地震直後、原発の事故が明らかになって電力不足の危険が広まってから、ネットでもどのようなツールを通じても手に入らなくなつてしまつている。その場で、私もどうにかしてという思いで、山際さんにその場で連絡を取つてみようと思つたが、現時点では如何様にも難しいという判断で電話をすることをやめた。

「漁師は、海を見ていなければ死んでしまう」

先日、永田町でお会いした歌津出身の女性がそう言つていたが、それは大げさでも何でもなく、本当なのだろう。そして、その一方で、そこまで仕事に夢中になつて打ち込める、漁師さんの気持ちの強さと、私自身に至らなさを反省してみたりするのであつた。そして、その住宅の男性から、お名前と住所と電話番号を伺うと、今後、こちらにも山際救援物資の拠点とさせて頂く事を約束し、その場を離れた。以降、多くの方の善意が満載された山際救援物資は、一日数箱の単位で集落の方々の元に届くようになった。

今回、自宅避難者の方を対象に支援物資を持つていこうと東京を出発し、現地で困窮している被災者の方を目的の当たりにして、今回の物資の送り先は間違いがなかつたことは確信している。しかし、自宅避難者や小規模の避難所にしつかりと物資が行き渡つていない現状を、なぜマスメディアが報道出来ないのか。そして、行政もなぜその現状認識を持つことが出来ないのかという点では、大きな危機感も感じた。

岬の果てで困窮する被災者は、復興という以前の問題、いわば如何に食料を手に入れサバイバルをしていくのかという、最もレベルの低いフェーズから抜け出せないままである。

確かに、南三陸町という町が、行政も津波によつて多くの被害を被つたことは紛れもない事実である。一時は、役場に保管されていた住民票も行方不明になり、一体誰が被災し亡くなられ、そして誰がどの場所に避難をしているのかという情報が完全に寸断された状況があつたことも事実である。言うまでもなく役場は、その全てが津波に浚われ原型を留めず、鉄骨で作られた防災庁舎では、再三再四テレビでも報道された町の防災管理課の女性をはじめ多くの方が犠牲となつてしまつた。佐藤仁町長もまた、防災庁舎のアンテナにしがみ付いて津波に耐え、そして寒中吹き荒ぶ中を一日耐え抜いて生還した被災者である。(そのような意味で考えれば、行政のリーダーである町長が犠牲になつた岩手県・大槌町なども同様の危機を抱えているのではないだろうか)

しかし、その大きなビハインドを差し引いても、一ヶ月半に渡つて自宅避難者の生存権すら危うい状況に晒されている現状は、やはり納得できないものを感じざるを得ない。日本が先進国として世界に誇れるほど成熟していないのか、それとも、今回の東日本大震災によつて齎された被害が何を疑うでもなく「想定外」だったのか。この結論が出るには、しばらく時間がかかるのだろう。

偉そうな口を聞くなと叩かれる前に、再び救援物資を南三陸町に持っていきこうと計画している。今回はゴールドデンウィーク、生鮮食料品を中心に持ち込むつもりでいる。取りあえず、今はそれしか出来ない。そして、自分の無力さを痛切に感じるとともに、何よりも強力な「当事者意識」と「危機感」を持って、被災者の方と一緒に、痛みをシェア出来たらと考えている。

### 南三陸レポート 其の二 (4月30日)

世間はゴールドデンウィーク。都心では震災前とまではいかないものの、活気を少しづつ取り戻している。そのような中で、私は再び被災地に赴くことにした。約二週間ぶりの南三陸町だ。今回は、友人や知人から託された支援物資と、野菜などの生鮮食料品を車に積み込んでの訪問である。最初に、今回支援物資を託してくれた友人・知人に心から感謝の気持ちを申し述べておきたい。

前回南三陸町を離れるとき、今まで経験したこともないような「後ろ髪を惹かれるような思い」に捕らわれた。さらに、大震災の渦中にある町と、「平時」の如く被災地を忘れてしまったかのように動いている東京の空気に戸惑い、通常の心持ちを取り戻すのに数日の時間を要した。そして、誰を疑うという訳ではないのだが、今回の大震災を多くの日本国民が「忘却」し、「無関心」を決め込んでしまっているのではないかと、このように猜疑心と危機感に捕らわれるようになった。

確かに、三月十一日以降、東京の空気も一変した。

震災当日の数百万単位に及んだ帰宅困難によるパニック、そして嘗てないほどの都心の大渋滞は記憶に新しい。そして、原発事故を契機とした計画停電による一般生活や産業界への影響があったことは紛れもない事実である。そして何より、関東においても千葉県や茨城県では甚大な津波の被害が発生した。浦安などの海岸に程近い住宅地においては、液状化現象による家屋の損壊などが発生。ライフラインの回復には長い時間を要し、住み慣れた我が家に住み続けることが出来ず、多くの被災者が生まれてしまったのも事実である。さらに今後、原発事故の影響が長期化することが予測される以上、この夏、電力需要が高まった場合の大きな混乱が生じる可能性も全く以って否定できない。東日本大震災による災害は一過性の災害ではなく、日本に住む多くの人間に何かしらの影響を及ぼしたのは言うまでもないところだろう。

であるならば、皆がああ記憶の一切を忘却し、被災地に対して無関心を決め込んでいるというのは言い過ぎかもしれない。しかし、多くの人にとって既にあの巨大地震と津波の記憶は少しづつ薄らいでしまっているのではないだろうか。私は考えてしまっているのである。さらに言えば、月日が過ぎればこの私自身も、前回訪れた南三陸町で起こった出来事を、そして出会った人たちの労苦や言葉を忘れてしまうのではないか。そんなことを考え、恐怖心を感じながらこの二週間を過ごしていた。

私だけではない。前回、南三陸町で会いお話をした方々も、被災地の外に住む日本国民がああ三月十一

日に起こった出来事を「忘却」し、そして被災地の人々に対し「無関心」になってしまいう状況を恐れているのだ。私は前回出会った女性の「昨日、仙台に行ってきたんだけど、何か取り残されている感じがした」という言葉が忘れられない。復興という言葉が独り歩きする中、自分自身は今までの生活を取り戻すことが出来ず、取り残されたまま時間だけが過ぎていく。私はその女性だけではなく、多くの方がそのようなことを恐れているような気がしてならなかったのである。

私は、様々な思いを廻らせながら、GWで渋滞が予測されるだろう仙台南部道路から東部道路を経由する最短コースを避け、古川ICから迂回するルートで南三陸町に入った。途中の国見SAで長時間の睡眠を取ってしまったこともあり、南三陸町に入るころには午前十一時になるうとしていた。先日の道中は抜けるような青空だったが、今回は見渡す限りの分厚い雲が私の頭上を覆っていた。

今回の最初の訪問先は、前回もお世話になった志津川中学校。志津川中学校の世話人さんは、山形の赤倉温泉で一時の休暇を取られていて不在だった(希望者を招待し、その代金は国や自治体が負担する。震災以降、初めての安息ではなかったかと思う)が、まだこの時点で世話人さんを含め、前回出会った多くの方がこの場所で避難生活を送っていた。

ここには、前日の時点で川崎市中原区の納豆業者さんであるMさんから託された納豆(二百食分)を一足早く届けた。前回もお世話になった炊事場を切り盛り



するTさんをはじめ、女性の方々が迎えてくれたが、震災以降納豆を食べられる機会が非常に少なかったように、大変喜んで頂くことが出来た。早速、配られる食事のメニューに追加されるだろうとのこと。Mさんから託された仕事は、まず一つ果たすことが出来た。

前回の訪問時に比べて、炊事場が簡素化され片付けられてしまったので事情を聞くと、ホテル観洋（R45沿いの海縁に建つホテル）に二次避難をする関係で、五月一日、つまりは本日から炊事場を撤去するとのこと。この中学校に特設で作られた炊事場では、震災後食料がある程度確保出来るようになって以降、そこに避難してきた女性の方が交代で炊事を行っていた。三度の食事は、東京都庁から派遣された職員などの手によって、全員分が分配されていたが、炊事場ではそれに加えて副菜など作っていたのだ。又、朝食時間の前に避難所から職場に向かう方の為に、朝食もそこで作られていた。この間、中学校に届けられる食材や山際救援物資の一部を使って様々な料理が作られており、煮物や、野菜のてんぷらなど多種多様な料理が作られていた。正直な話、この「副菜」こそが中学校で避難生活を送っている被災者の方の栄養バランスをギリギリのところまで守ってきたと言っても過言ではないほどである。（なぜ、そう思ったのかは後述する）

私は、世話役さんが戻った後、必ず顔を出すことを告げ、次の目的地へと向かった。

今回の私の物資の主な提供先になったのは、南三陸町の南東部に位置する戸倉地区の寺浜という集落だっ

た。志津川の中心から十キロ近くは離れているだろうか。前回訪れた歌津の田の頭地区と同様に、自宅避難を余儀なくされている方が多くいる地区である。車を急がせるが、このあたり一帯も津波によって多くの家屋が流され、国道のアスファルトは無残にも引き剥がされ、思うように走ることが出来ない。そして、津波が齎した残酷な風景は、その集落に辿り着くまで延々と続いた。

この寺浜集落は、当初志津川中学校の世話人さんであるKさん御兄弟と、Oさんが中学校に届いた世話人さん宛の支援物資を運んでいただいていた地区だったが、ニーズが多く、さらに物資の仕分け・分配を率先して行って頂ける方が名乗りを上げたことから、後に新しく山際支援物資の集積の拠点として開拓された場所である。到着すると、十五名程の方が寺浜の世話人さんのお宅に集まっていた。事前に電話をさせて頂いたのでスムーズに物資を受け渡し、集まっていたいた皆さんから様々なお話を聞くことが出来た。

こちらの集落では、電気が通つてある程度の基盤が出来上がったら、漁業の継続や民宿などの経営について、個々で動き出すだろうということを話してくれた。近く、避難所としていた集会所も一時解散させるという話だ。漁業を継続させるために動き出す方、そして民宿の再建に向けて動き出す方、状況は様々だが家屋が残っている方が多いという状況がある分、若干展望は開けているのかもしれないが、近隣の多くの方は町外避難などを余儀なくされているという。

そんな中、兵庫県尼崎市から、自らトラックを運転

し、南三陸町まで単独行で救援物資を持ってきたという女性ともお話をすることが出来た。その方も、阪神大震災の記憶があり、状況に沈黙することが出来ず、自らの意志でGWを利用し物資を持ちこんだのだという。女性は強い。これは敵わないと心底驚嘆した事実も書き添えておきたい。（これは別の話だが、軽トラックに物資を満載し南三陸町に入った後、車も必要だろうと軽トラックごと置いて立ち去った男性もいたらしい。）

#### ・行き場のない漁師の方々、そして焦燥感

翌日は、前回も訪問した歌津地区の田の頭にあるAさん宅を訪問。ここには、四月十六日に私が最初に訪問して以降、救援物資が全国から届くようになった。ここでは、Aさんご家族の近況と、復旧状況、そして漁業のことなどを数時間に渡って話しを聞くことが出来た。

南三陸町で漁業に従事する方は九百名弱、生産人口の十七パーセントの方の生業が漁業である。南三陸町では、ワカメ、帆立、ホヤ貝、鮑、牡蠣などの養殖、そして鱒、鮭の漁が盛んで、歌津地区（旧歌津町）の鮑はその質の良さから昭和天皇に献上された経緯もある。故に、隣の気仙沼、石巻、そして岩手県沿岸の漁師町と共に、日本の海洋資源を支える大きな一翼であったことは言うまでもない。

しかし、三月十一日の東日本大震災によって引き起こされた大津波によって壊滅的な被害を被ってしまった。漁業を司る多くの施設が壊滅状態になり、九割弱

の漁船が失われ、漁場も瓦礫の山に覆われ、全く漁業再開の目処が立てられないほどのダメージを追ってしまったのである。私は、それまで漁業についての知識は皆無であったが、漁船や漁具の購入、そして燃料代などのランニングコストがここまで掛かるものだと初めて認識し、田の頭集落で生活する漁師の方々の焦燥感を肌で感じ取ることが出来た。

そこに輪を掛けて原発の問題もある。もし、長い復旧期間の後、漁場が復旧したとしても、今度は放射性物質による海洋汚染の問題が降りかかってくるかもしれない。ローンの支払いなどの金銭的な不安に加え、復旧を果たした後、本当に漁業を続けていけるかどうかの不透明な状況なのだ。今後に向けてのリスクが大きい中で、後先見えない復旧作業に取り込んでいくことは、モチベーションの維持にもおおきな影響を及ぼすことになるだろう。

又、政治に期待したいが、どれだけ保障されるかという点で大きな疑問があるという忌憚のない意見も聞くことが出来た。今回の震災被害への保障がどこまで成されるのか。これは漁業従事者の方だけではなく、原発事故の被害を被った方々など多種多様なパターンが考えられるが、これには、政治を司る方々には自分の命と引き換えにしても被災者を救済するのだという強い意思と覚悟を示し、具体的な策を講じて頂きたいと強く願っている。

五月三日は、志津川中学校へ。高台から見下ろす街は、

初めて訪れた二週間前と殆ど変っていない。ただ、散らばった瓦礫が自衛隊の手によって寄せ集められ、外に運び出せるような状況になったところも散見された。自衛隊を初めとする復旧に従事した方々の苦労には、何にも変え難い困難があったと容易に推察出来る風景である。心から敬意を表す以外にない。

ソフトボール部と野球部が兼用で使用していたグラウンドは敷地の半分が駐車場として利用され、半分は仮設住宅建設の真最中だった。今着工中の仮設住宅は百二戸。順調に行けば五月十七日から、第一次の入居が始まる。某ハウスメーカーと協力会社が完成を急いでいた。以前からお世話になっている世話人さんのお三方は、その仮設住宅建設の現場で仕事だった。仮設住宅の外構工事の手伝いのように時間は午前八時から午後五時までだ。もちろん日当はつく。

仮設住宅の数は、今現在も町全体で相当数不足しているというのが現状だ。なぜなら、仮設住宅建設に適した平地が限りなく少ないからだ。市街地であった場所はその殆どが津波に浚われ瓦礫が今もなお堆く残されている。町営の野球場や、学校のグラウンドに仮設住宅を建設しているが数は足りていない。最近になって町が民間の土地を借り上げ、整地し、新たに仮設住宅を建設するという計画を立て始めているが、それでも慢性的な仮設住宅の不足が解消するには、もう少し時間が掛かりそうである。

初日にお世話になったTさんなど皆さんに挨拶し、

世間話というか最近の中学校の様子を聞くことにした。驚いたのはまだ電気が通っていないことだった。最初に訪問した際には、あと数日で電気が来るという話を聞いていたので油断していた。もちろん、水道も通っていない状況は変わらない。五月三日現在、八十人弱が避難生活を続け、五月七日までに中学校に避難している九割以上が、そこから五キロ程離れた観光ホテルであるホテル観洋に、二次避難を行うとのことだった。私がお話をさせて頂いた方は、GW中に中学校を離れるという。

5月10日前後に学校では授業が再開されるが、ベイサイドアリーナ（最大の避難所）に避難している一部の方と、志津川小学校に避難している一部の方、合わせて二百名程の被災者の方が今度は中学校の体育館に二次避難という形で引越してくるようになっていくそう。そして、今まで南三陸町の最大の避難所としてメディアでも多く取り上げられたベイサイドアリーナは避難所としての機能を終えることになった。今後、避難所を集約させていく方向性らしい。又、子供を抱える多くの家族が、他の街に出てしまっているという話も耳にした。多くの財産を失い、仕事することも儘成らず、義捐金の配布もまったく行われていないという状況での転居はリスクも少なくない。ベイサイドアリーナを始め、小さな子供を持つ家族の避難生活の苦労が大きいことは前回も記述しているが、町には子供は僅かになってしまったという。

前述した炊事場の撤去により、副菜が作ることが出

来ない状況になってしまい、避難生活をされている方の食生活は厳しくなってしまった。

(繰り返すが、中学校に送られてくる食材を使って様々な料理が作られていた。煮物や、野菜のてんぷら、食材が多く手に入ったときには、100人前を優に超える料理を作ったこともあったらしい。この副菜が中学校で避難生活を送っている方の栄養バランスをギリギリのところまで守ってきたのだ。)

私の滞在した時の避難所の公式メニューは以下の通り。

5月3日昼 カップラーメン一つ

5月3日夜 ご飯一杯、味噌汁、鯖缶、刻みキャベツ。

5月4日朝 ご飯一杯、味噌汁、昆布少々、グレープ

フルーツ二切、納豆

(納豆は、私が初日に持ち込んだもの)

(炊き出しが来た場合は、その限りではない)

い↓中学校にはあまり来ない)

避難所の方によっては、これで十分かという人がいるかもしれないが、町が、個人支援を打ち切っていないから、実際、避難者に提供される食事はこの程度なのである。南三陸町全体がこういう状況になっているとは言いがたいが、事実として報告しておきたい。

又、町の主要避難所に電気が既に通っているにも関わらず、中学校に出来ない理由には少々驚かされた。変電所が東北電力の持ち物ではなく、南三陸町の管轄下に置かれているので、新設しようにも東北電力が手を

出せないというのだ。繰り返す、体育館には五月七日に大挙二百名の避難者が押し寄せてくる。電気もない。しかも、これから気温も上昇してくる。体育館にはエアコンはない。今後、どのように残った被災者をケアしていくのだろうか。話を聞いていて暗澹たる気持ちになってしまった。

ちなみに、中学校に避難している方の多くが二次避難先として利用するホテル観洋。三陸屈指の有名ホテルの一つだが、こちらもライフラインが回復していない。しかも、仮設のトイレが遠く、エレベーターが使えず、入浴も一週間に一度ということから、高齢者を始めとする多くの人が、利用を拒否しているという。おそらくこの生活は、仮設住宅のめどがつくあと半年は続く。津波で助かって、その後の生活の実態はこのような感じなのである。

Tさんや、炊事場跡にいた女性から色々な話を聞いた後、私は世話役さんが戻ってくるまで隣町に買い物に出掛けた。皆さんと中学校で色々な話が出るのも、おそらくこれが最後かもしれない。というわけで、今回の「裏救援物資」ということで、隣町で刺身を大量に買い込んで避難所に戻った。南三陸町の人に魚介類のない生活は考えられないのだから。

買い物から戻ると、毎日新聞仙台支局の写真記者、Tさん、その他の奥様方が炊事場跡のお茶のみ場で、井戸端会議していた。なぜか、私も記者さんにご挨拶。そこに四名の自衛隊さんが現れ、翌日にこの場所を離れることをTさんに告げていた。自衛隊の方の、本当

に使命感に満ちた表情が印象的だった。毎日新聞仙台支局の記者さんも、地震の数日後から殆ど南三陸町で取材を続けているという。私は、「東京の人間や外の人間が、被災者の方のことを忘れないような報道をしてもらいたい」。そう、丁寧にお願ひした。「本当にその通りだと思えます」と神妙な表情をした。なぜ、私がそのようにその記者さんに話をしたのか。

これは、東日本大震災という「現在進行形」の未曾有の大災害すら、被災地以外の場所に住む日本人にとっては、時間の経過と共に正しく「ドラマ化」していくのではないか。そういう、危機感を持ち、被災地以外に住む国民が、この未曾有の惨事を、当事者意識を持って捉えられなくなるのではないかと強く懸念しているからである。

被災地においては、様々なメディアが取材活動を行っている。南三陸町最大の避難所にはキー局を始め、マスメディアの人間が大挙集結しており、今もそうだろう。しかし、東京に帰ってくるなり、三陸地方の津波被害は原発のニュースの脇に追いやられ、たとえ報道があつたとしても「キティちゃん」が避難所を訪れた」であるとか、津波に瞬時にして人生を一変させられた人々の悲哀を、さもドラマの世界で起こっている出来事かの如く報道している。

事実、五月三日の昼過ぎごろには大挙としてメディアが中学校に現れた。タイムカプセルの開封式だそう

だ。  
<http://headlines.yahoo.co.jp/videonews/fnn?n=20110-0000709-fnn-soci>

こういうものは、ニュースになるのだ。

マスメディアの報道のありかたがこの程度であることは、今からちょうど3年前の長野聖火リレーで嫌と言うほど実感し、頭ではわかつている。だが、やはり心中は穏やかではない。被災者の方と現地に入ったボランティアが結婚したとか、それは確かに目出度く素敵な話なのだと思います。しかし、正直な話、そのような人間模様ばかりが報道されている現状には心から危機感を感じている次第だ。

幹線道路を一本外れた先で、耐え続ける被災者の声を聞いてほしい。そして、家財は無事でも、ライフラインが未だ復旧せず仕事も失った挙句、避難所からも見放された自宅被災者がいることを知ってほしい。そして、生々しい被災者の声を全国に届けてほしい。安易なマスコミ批判はするべきではないが、是非マスメディアの方々にはそのような所に気を配って欲しいと願うばかりだ。

山際救援物資の世話人を努めてくださっているKさん兄弟、そしてOさんが仕事から戻ってきて再会。前は炊事場で、救援物資の中から食材を選び色々料理を作っていたが、もうその光景はなく、簡単な食事で夕食の時間は過ぎていった（メニューは前述）。

その後は、教室の片隅で、私が先程隣町から仕入れてきたイカやマグロの刺身をツマミに本日の打ち上げである。以前は、炊事場でスルメを炙ったりもしていたが、それは叶わず、ささやかな宴会が始まった。大規模な避難所であると、基本的にお酒を飲むことはご法度なのだが、それが全くない生活というのも異

常である。ここでは、常識の範囲内で軽い宴会は容認されていた。

そこに、私が初日に中学校に二百食持ち込んだ納豆の業者さんであるMさんが合流。やはり、高台にある中学校から見た町の風景にはMさんも言葉を失った様子だった。途中、石巻のとあるNPOに支援物資の納豆を渡したそうだが、こちらの状況を把握するなり、「全部、こつちに持つてくるべきだった…」と仰っていた。南三陸の現状が厳しい状況であるということは、容易に悟ることが出来るのである。

今回のささやかな宴会では、現在の避難所をまとめる班長さんの話を聞くことが出来た。その班長さんは、町で唯一のセレモニーホールである高野会館で地震に遭遇したそうだ。当時は町の催し物が開かれており、班長さんはカメラマンとして参加していたとのこと。地震直後、地震当時四百人近くが会館にいらしたらしい。地震直後、大津波の危険を感じた全ての方は上層階に避難。全員津波から免れたそうだが、ビルの殆どが津波に浸われ、海水が侵入してこなかったのは四階部分の極僅かなスペースと、ペントハウス状になったボイラー室のみ。そこで四百人が、ほぼ丸一日、津波をやり過ごしていたそうだ。

動画投稿サイト「ユーチューブ」には、地震翌日朝の南三陸町の状況を空撮したニュース映像が残っている。是非確認して頂きたい。動画開始秒位に写っている横長の大きい建物は志津川病院、右下が商業施設のサンポート、そして、その左側の建物が高野会館で

ある。一分過ぎからさらにズームされて、屋上から助けを求めている。班長さんも、ヘリに向かって合図を送っていたという。志津川病院でも二百名程が救出されているが、合わせれば少なくともこのニュース映像の中には六百名程の生存者がいたことになる。山際さんとの生電話や、今後どのように協力できるかを意見交換をしながら、あつという間にタイムリミットの二十一時半。ささやかな宴会は幕を閉じた。

その後、世話役の一人の方と外に出て、少しづつ明りが灯り始めた志津川の夜景を見ながら色々な話を聞いた。

「確かに子供、年寄りもキツイけど、俺らも結構参ってるよ（笑）。どうやって、今後家族にメシを食わせていこうとかさ…、色々あるんだ。山際さんに賛同して荷物を送ってくれる人は、大人もケアしてくれるものも送ってくれるから、本当に助かるよ。大きい声では言えないけどね（笑）。なんとか大人が踏ん張って、年月は掛かるけど立て直そうと思う。」

長年海の上で生きてきた男の決意を聞きながら、自分自身を反省したりもした。もつともつと、必死に生きなければならぬ強き思い、心に誓った次第である。支援をしているようで、色々な方と出会って、実は余りある程の目に見えない何かを頂いているような気がしたこの数日間。初めて訪れた町、そして初めて出会った多くの方、そしてこの時間を、無駄にすることなく、何が出来たのか。改めて胸に問い直し、今後も出来る限りのことを精一杯行っていきたい。

（担当：廣瀬）



## 書籍紹介



世界の歴史7  
宋と中央ユーラシア  
井原 弘／梅村 坦 著  
中央公論社

本書は第一部「宋と高麗」、第二部「中央ユーラシアのエネルギー」の2部からなり、ウイグルが関係するのは梅村坦氏執筆の第二部で、7世紀頃から13世紀にかけての中央ユーラシア史を記述しています。

ウイグル人の故地として現在のモンゴル高原に遊牧ウイグル帝国（8世紀～9世紀）があり、帝国崩壊後に現在の東トルキスタンに南下、移住し現地ですでにテュルク化していた現地の人たちと混血し現在のウイグル人を形成していったわけですが、遊牧ウイグル帝国、あるいは天山ウイグル王国について書かれた著作は「シルクロードと唐帝国」「西ウイグル国史の研究」など少なく「西ウイグル国史の研究」は絶版で入手が困難な為、この時代のウイグルの歴史に興味のある方にとり貴重な資料です。

遊牧ウイグル帝国はモンゴル高原にありソグド、唐の影響を受け遊牧民でありながら都市をもっていました。ウイグルの宗教は現在、イスラムですが当時はマニ教を信仰していました。当時、唐帝国は8世紀半ば

の安史の乱で大混乱し、中央集権が揺らぎますが、唐帝国は遊牧ウイグル帝国の協力で辛うじて王朝の崩壊を防ぎます。強勢を誇った遊牧ウイグル帝国ですが北方のキルギスの攻撃によりあっさり崩壊してしまいます。

遊牧ウイグル帝国の首都と言えるのがモンゴルに遺跡として残っている「カラ・バルガスン」遺跡です。本書によると「カラ・バルガスン遺跡」はそれほど発掘、調査は進んでいないそうでこれからウイグルの歴史に関して何か出るのではと期待されます。

崩壊したウイグル帝国の遺民が南下し東トルキスタンに定着して作ったのが東側の「天山ウイグル王国」で西側には10世紀頃「カラハン朝」が形成されていきます。

東の「天山ウイグル王国」は10世紀ごろまでには仏教を信仰し、西の「カラハン朝」は10世紀頃よりイスラム化していきます。「天山ウイグル王国」は高度な文化をもっており本書で古代ウイグル文字がモンゴルに初めて文字をもたらし、さらにモンゴルから満洲につたえられ満洲文字になったことを紹介しています。モンゴル文字（ウイグル文字）はモンゴル系の民族で広く使われていましたが、残念ながら現在ではモンゴル国、ブリヤートはキリル文字化され南モンゴル（内モンゴル自治区）でのみ使用されている文字です。

「天山ウイグル王国」はモンゴル帝国の支配下に入りながらモンゴル帝国の中で優秀な人材を輩出してきました。本書では多くの例を挙げてこれを説明してい

ます。本書では取上げられていませんが元寇時にモンゴル側の使者が来て鎌倉幕府と交渉したという話を思い出しました。使者の中に「天山ウイグル王国」出身者がいるといわれます。全体を通して本書からも東トルキスタンの地が漢帝国、唐帝国の一部の時代以外は中国の王朝の支配下ではなかったことが分かります。

中国は歴史論争を恐れており知人のウイグル人でトウルグン・アルマスの「uyghurlar」を職場の集会で批判演説するよう要請されたがそもそも禁書で読んだことがなくて困ったという話を聞いたことがあります。

また本書はウイグルを中心に宋、唐の中国王朝、キタン、カラ・キタイ、モンゴルなど周辺の状況にも書かれているので学校で習う中国史中心の世界史と違う視点をもつことができ、その点がとても貴重と感じています。（担当：M）

### 協会主催上映会開催のお知らせ

協会では次の通り東京・荒川区にて上映会を開催いたします。是非足をお運び下さい。

日時 7月31日（日） 14時開場

14時15分開場

場所 ムーブ町屋4階ハイビジョンルーム

交通 地下鉄千代田線町屋駅0番出口 徒歩1分

京成線町屋駅・都電町屋駅 徒歩1分

上映作品 「Death on The Silk Road」ほか核関連の映像作品

宜しくお願致します。

中国の歴史には、漢人の王朝以外の異民族による王朝の時代が含まれている。その歴代王朝で本格的に東トルキスタンを支配することができたのは、満人の征服王朝である清のときからであると言つて良い。それ以前に中国の歴代王朝がこの地域を支配できたのは、漢と唐代の一時、「西域都護府」と「安西都護府」を置いたときのみである。中国政府は歴史上一貫して東トルキスタンを支配し続けたかのように喧伝しているが、これは事実と異なる。そもそも中国歴代王朝は東トルキスタンを「西域」と呼び、万里の長城によって境界を画し、「中国」とは異なる「化外の地（王権の及ばないところ）」とみなしていたのである。

現在東トルキスタンと呼ばれるこの地域に最初に住み始めたのは、イラン系・インド系のアーリア人であったが、紀元前2世紀からは遊牧民族の匈奴が、ついで柔然、紀元6世紀からはテュルク系の突厥がこの地域を支配した。

そしてこの地域をテュルク系民族の住む地域「トルキスタン」としていく主体となったのは2つのウイグル王国、天山ウイグル王国とカラハン朝である。両者とも現在のモンゴル高原にあった遊牧ウイグル帝国からの遺民が造った国であった。

天山ウイグル王国はそれまでの遊牧から定住へと生活様式を転換し、マニ教、ついで仏教、景教などを受容し、独自の文化を展開していった。

カラハン朝は、王サトゥク・ボグラ・ハンのときにテュルク民族としては初めてイスラム教を受容したと言われており、東西へ向けてジハードを展開していった。このときにカラハン朝が支配したタリム盆地の西部半部までが、イスラム化することになった。なお首都であったカシユガルは、イスラミ文化の中心地へと生まれ変わり、芸術、科学、文学などが繁栄した。

このテュルク系イスラム文化の先駆であり、また最も偉大な文学作品であるのが、ユスフ・ハス・ハジブの「クタドグ・ビリク（幸福になるための知恵）」と、マフムード・カシユガリーの「ディーワーン・ルガート・アツテュルク（テュルク語大辞典）」である。

その後ウイグル人は、世界的な大帝国を築いたモンゴル帝国の前に、あえて武力的抵抗をせず、彼らの頭脳として働くことを選んだ。ウイグル人は「モンゴル統治の教師」と言われる程に、その経験と知識を存分に用い、さらに世界各地に出向いて貿易に従事し、ウイグル商人として名を馳せていった。

モンゴル帝国はその後分裂し、その後継国である東チャガタイ・ハン国、次いでモグーリスタン・ハン国、ヤルカンド・ハン国の順でモンゴル系王朝が東トルキスタンを支配した。彼ら支配層も、もともとはモンゴル系遊牧民とはいえ次第に定住化せざるを得なくなると、更に言語的にテュルク化、宗教的にもイスラム化していった。なお、このモグーリスタン・ハン国のときに、タリム盆地全域のイスラム化が完成した。

タリム盆地を支配していたモンゴル人王朝の名目的

な支配者はモグーリスタン・ハン家であったが、実際に諸都市の実権を握っていたのはホジャと呼ばれるイスラム宗教貴族であった。

その後、西モンゴル族（オイラト）の一部族であるジュンガル部が、次第にこの地域に支配を伸ばしてきた。ジュンガル帝国3代目ハンのガルダン・ハンの統治下で、帝国はその支配域を大いに広げた。彼はチベット仏教の活仏と認定され、幼少期をダライ・ラマ5世の下で過ごしていた。ダライ・ラマ5世はガルダンを強く支持し、ガルダンはこれに応え、チベット仏教の守護者として戦いに臨み、東トルキスタン全域からモンゴル高原西部にいたる大遊牧帝国を築き上げた。

その後東モンゴル族のハルハ部も破ったが、ハルハ部が清に援助を求めたことで、ジュンガル帝国と清朝とが全面対決することになった。

清による東トルキスタンの支配は、ジュンガル帝国との攻防を繰り返した後、1755年に乾隆帝によって成された。この時のジュンガル帝国滅亡は、清軍が持ち込んだ天然痘と相まって、壊滅的なものとなった。

次いで1759年にタリム盆地のヤルカンド・ハン国も滅ぼされたが、このときに西トルキスタンに逃げ延びたホジャの子孫が、後に失地回復のための聖戦を繰り返すことになる。このようにしてジュンガル盆地（準部）とタリムイスラム地域（回部）を手に入れた清は、両部をあわせ「新疆」、つまり新しい辺境の領土と名付けた。

清朝の支配は、將軍や大臣の下の各都市の首長をウイグル人が務めるといふ、比較的自治に近いものであった。これはチベットでも同様であり、圧倒的多数の漢人を少数派の満州人皇帝が抑えるために、チベット、ウイグル人を味方にするための優遇措置であったと考えられる。このような統治もあり、19世紀前半から60年ほど東トルキスタンは平穩であつたと言われる。

19世紀中ごろから、清朝内地では、イスラム教徒による反乱が頻発していた。このイスラム教徒の反乱に刺激され、さらにホジャによる失地回復の聖戦とそれを支援するウイグル人の奮闘の結果、西トルキスタンのコーカンド・ハン国の将であつたヤクブ・ベクがカシユガル・ハン国を建てた。

これにより東トルキスタンは再びテュルク人によるイスラム政権を樹立することができたのである。対外的にもロシア、イギリスと通商条約を結び、オスマン・トルコを宗主国とするなど、その存在は国際的にも認められていた。

しかしこの国も1877年、清の將軍である左宗棠に侵略され、東トルキスタンは再び清の支配されることとなった。1884年には新疆省となり、内地と同様の道州府県が置かれ、清によって直接統治されることとなった。

なお、1840年頃から20世紀初頭の中央アジアは英露両国の勢力争いの場となつていた。また両国をはじめとしたヨーロッパ諸国や日本の探検家による調

査も行なわれるようになり、中央アジアのさまざまな地理的、歴史的な発見がなされた。

また、ロシアの圧迫に反発し、ロシア内部や西トルキスタンのテュルク系ムスリム知識人の中から近代的改革の動きが生まれた。彼ら知識人が普及に努めた近代的教育方式（ウスリ・ジャデイド）に由来し、この運動をジャデイド運動という。これと期を同じくして、東トルキスタンでもジャデイド運動が起きた。

近代化による、商業の国際化、工業の発展のためには、科学的な知識や技術を身につけた人材が必要である。それまでのイスラム教の寺子屋のような初頭教育施設だけでは十分な教育は施せない、民族のアイデンティティが脅かされると危機感を抱いた人々は、新方式の学校を建て、イスラム教の宗教教育の他にも、読み書きや計算、歴史、近代科学を教えるようになった。当時の先進地であつたクリミア・タタールやトルコのイスタンブールなどへ留学生を出したり、当地の教師を招聘するなどして、民族の教育に尽力を払った。

有名な教育者としてはアブドウルカーデイル、スポンサーとしてはムーサー・バヨフ家などがある。彼らの思想は、汎トルコ主義・汎イスラム主義であるとして、中国の安定を脅かす危険な思想とみなされて弾圧を受けるようになった。ジャデイド運動を行った知識人の中には、後の東トルキスタン共和国の成立に大きな役割を果たした者もいる。

新疆省になつてから清朝滅亡までの30年間は、比

較的小康状態が保たれたが、1911年には辛亥革命によつて清が滅び、中華民国が成立した。このときに外モンゴルは独立してソ連の衛星国になり、チベットは紆余曲折をたどつて事実上の独立国となった。そしてそれに遅れること約20年、ついに東トルキスタンでも侵略者を追い出し自らの土地を取り戻そうという動きが高まつてきた。

中華民国成立時の新疆政府は、名目上は南京の政府の配下に置かれていたが、実質は漢民族の軍閥によつて支配されていた。清末期から続いていた東トルキスタンへの漢民族の大量移住と彼らからの差別や抑圧、また同化政策によつて、テュルク系諸民族の間に不満と怒りとが鬱積しており、きっかけがあれば一気に爆発する状態になつていた。

そして、1931年3月にハミで起きた蜂起は東トルキスタン各地に飛び火した。その混乱のさ中、1933年初めホータンでムハンマド・イミン・ブグラが主導した蜂起は、同時に起きたカラシヤール、クチャ、アクスの蜂起と合流し、11月カシユガルにて「東トルキスタン・イスラム共和国」の独立宣言を出すまでに至つた。

大統領にはホジャ・ニヤズ、首相にはサビト・ダムラーが擁立された。しかしこの国家は、民族間の対立で連携が崩れたことと、中国国民党の弾圧やソ連の干渉、回族軍閥の侵略によつて1934年春に終焉を迎えた。

これら1931年から1934年にかけての蜂起と独立運動はいずれも失敗に終わったが、この頃の新疆

情勢について日本政府は強い関心を持ち注視していた。国外に亡命した東トルキスタン・イスラム共和国の指導者たちに対して日本政府は積極的に接触し、現地の情報を集めていた。指導者の中には東京まで亡命してきた者もいた。彼らは日本の支援を受けて独立運動を継続しようと考えていたようであるが、日本政府が新疆に対しての関心を失ってしまったため実現しなかった。

それから10年後の1944年11月12日、新疆省主席が左遷された混乱時に、テュルク系民族らによる民族解放組織がイリのグルジャ市で「東トルキスタン共和国」の独立を宣言した。主席はイリハン・トレで、閣僚は諸民族から成っていた。ソ連軍人の援助を受けた東トルキスタン軍は、イリ地区、タルバガタイ地区、アルタイ地区を掌握した(中国共産党はこれを三区革命と呼ぶ)。1945年9月にはウルムチの郊外にまで迫ったが、突然進軍を停止した。これは8月のヤルタ会談の際に行われたソ連と国民党との密約で、外モンゴルの独立・満州の権益と引き換えに、中国が東トルキスタンを支配するという交換条件が結ばれていたためである。

武力による独立闘争に代わり、中国政府と東トルキスタン政府の和平交渉が始まり、ソ連の仲介によって、1946年ウルムチの国民党政府と和平協定を締結するに至った。お互いの閣僚を出し合って新疆省連合政府が成立したものの、やがて分裂し、旧東トルキスタン政府の閣僚は全てイリに戻り自治を宣言した。

そして1949年、国共内戦を制した人民解放軍が迫る中、ソ連の斡旋によって、イリの自治政府は中国共産党との協議を決定した。8月に開催される会議に参加するため政治的指導者たちは北京に向かったが、彼らに乗せた航空機は行方不明となる。一説にはソ連に連れ去られ殺害されたとも言われる。

政治的指導者を失った東トルキスタンは、1949年12月人民解放軍によって「解放」された。1955年、新疆省は新疆ウイグル自治区となり、現在に至っている。



クタドグ・ビリクを著した  
ユスフ・ハス・ハジブの肖像。  
(カシュガル)

### 編集後記

○毎度の事ながら発行が遅くなりまして申し訳ありません○中国共産党の圧力にカザフスタンへの亡命者も送還、己が無力に忸怩たる思いです○世界ウイグル会議サイトはハッカー攻撃により休止中の由、口を塞いでも真実の一つ○本号掲載日本国内の震災支援のレポート、メディアや危機管理の在り方他、私達ウイグル協会の活動に対する示唆も多くある様に思います○協会主催上映会は関東が中心ですが、今後も回を重ねてゆく方向で計画中です○今後続く暑い日々、どうかご自愛下さい。(編集「ぬ」)



日本ウイグル協会  
公式サイト  
<http://uyghur-j.org/>  
メールアドレス  
[info@uyghur-j.org](mailto:info@uyghur-j.org)

### 広島における活動予定のお知らせ

一昨年より毎年行っており、広島に於ける活動を、今夏も行います。詳細は次の通りです。

8月6日(土)

チラシ配布

6時30～10時 平和公園周辺

街頭宣伝

13時～15時 ところひろ店前

8月7日(日)

街頭宣伝

13時～15時 本通

集会「ウイグルの被曝を考える集会」

17時開場 17時30分開始

広島市まちづくり市民プラザ

北棟6階スタジオ

(広島市中区袋町6番36号)

・「Death on The Silk Road」上映

・イリハム・マハムテイ挨拶

・ウイグルの核被害についての解説

会費500円